

## 献 辞

2014年3月末をもって、人文学部英語英文学科所属の神谷正太郎先生がご退職なされました。まずは、29年間の長きにわたって、研究・教育の両面から本学の発展に寄与してこられました神谷先生に敬意を表し、心から感謝申し上げます。『広島修大論集』第55巻第1号が刊行されるにあたり、これを神谷正太郎教授退職記念号とするとともに、先生のご活躍の一端をご紹介して、献辞に代えさせていただきます。

神谷先生が本学に赴任されたのは1985年4月のことであります。当初は商学部の所属でいらっしゃいましたが、その後1996年に大学院充実のためもあり、人文学部にお迎えいたしました。

神谷先生の研究分野は言うまでもなく英文学、わけでも20世紀初頭の英国作家であります。具体的には、Joseph Conrad, E. M. Forster, James Joyce, D. H. Lawrence などの名をあげることができますが、特に D. H. Lawrence については数多くの研究論文を発表されており、先生の研究活動の中心にこの作家が位置していたことは間違いのないところであります。実際、先生が日本ロレンス協会の評議員を務めていらっしゃるのもこのようなご業績を評価されてのことであろうと推察いたします。D. H. Lawrence といえば、人間という存在が内包する根元的課題について執拗な問いかけを行った作家であります。一見温厚そうな神谷先生のお人柄の奥でも、やはり、そのような問いかけが行われていたということでありましょうか。とすれば、授業を通してそれを現在の学生がどのように受け止めたのか、きわめて興味深いところでもあります。なお、本学図書館には D. H. Lawrence の *Lady Chatterley's Lover* (『チャタレイ夫人の恋人』) の初刊本が所蔵されており、これも神谷先生のご功績のひとつと考えております。

神谷先生は、本学で過ごされた30年近い年月の間に、就職部長（現キャリアセンター長）を6年、人文学部長を3年、そして人文科学研究科長を2年と合計11年にわたって役職者としてご活躍なされました。これらのご経歴はまぎれもなく先生の人望の厚さを物語るものがあります。途中、学部長在任中に大病に見舞われ、病魔との闘いのすさまじさはご面容にもうかがわれましたが、その後、見事に乗り越えられたことはご本人にはもちろんのこと、同僚にとっても大きな喜びでありました。また、大病を克服された先生の精神力にはあらためて驚嘆するばかりでありました。

教育、研究、そして役職者としての大学運営、このようにお忙しい日々の中で、息抜きと呼べるものがあつたのでありましょうか。私どもが知る限り、そのひとつは星をご覧になることだったようであります。望遠鏡の向こうに見える星空は、先生にとってどのような世界

に映ったのでしょうか。星を見ながら何をお考えになっておられたのでしょうか。無粋な私どもには到底思いの至らぬところですが、機会を見つけて、ぜひ一度、お尋ねしたいものがあります。

長身にして瘦躯，スーツをパリッと着こなし，冬にはロングコートとソフト帽に身を包んだ姿はいかにもダンディ，軽薄な表現で恐縮ですが，イギリス紳士を思わせるお姿であります。そのお姿を研究棟でお見かけできなくなるのはいかにも残念であります，いましばらくは非常勤講師として本学の教育にご尽力いただけることになっています。ということは，上に記してきたようなことをお尋ねする機会にも恵まれる可能性があるということです。照れ屋の先生ゆえ，どこまでお話しなったださるかはわかりませんが，こちらの水の向け次第では，人生の先人として興味深いお話を聞かせていただけるのではないかと期待しております。

神谷先生は，ご退任の挨拶の中で，「明るく自由で，のびのびした修大の雰囲気よかった」とお話しになりました。あとに残る者としては，その学風を守ることこそが神谷先生への恩返しにほかならないと改めて意を決する次第であります。最後に，神谷先生の益々のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

人文学部長

増 田 尚 史

人文科学研究科長

市 川 薫